



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 父への祈り : ルカ11:1-13の釈義的考察

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 嶺重 淑  |
| 雑誌名 | 関西学院大学キリスト教と文化研究  |
| 号   | 20  |
| ページ | 1-20  |
| 発行年 | 2019-03-31  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10236/00027883">http://hdl.handle.net/10236/00027883</a> |

# 父への祈り

——ルカ11:1-13の釈義的考察——

嶺 重 淑

## 序

「祈り」があらゆる宗教に共通する宗教的な営みであることは言うまでもないが、なかでもユダヤ教とキリスト教は「祈りの宗教」と称せられてきたことから明らかなように、特に祈りという営みを重視してきた。そして、ユダヤ教を母胎として誕生したキリスト教の成立事情からも容易に想像できるように、キリスト教の祈りはユダヤ教の祈りの伝統を受け継ぎ、そこから多くの要素を取り入れている。その一方で、キリスト教の祈りには、ユダヤ教のそれとは異なる独自の要素も見られ、両者間の相違点は、旧約聖書における祈りと新約聖書における祈りとを比較検討することにより明らかとなる。

もっとも、新約聖書においても、祈り理解は必ずしも一様ではなく、新約各文書においてそれぞれの特徴が見られる。なかでもルカ文書は、新約諸文書の中でも特に祈りに大きな関心を寄せ、祈りに関する語彙やテキストを数多く含み、特徴的な祈り理解を示している<sup>1</sup>。そこで本稿では、祈りを主題とする一連のイエスの教えを記しているルカ11:1-13のテキストに注目し<sup>2</sup>、ここに示されているルカに特徴的な祈り理解について考察していきたい。

1 嶺重「新約聖書における祈り—その聴許の可能性をめぐる」『キリスト教と文化研究』7号、キリスト教と文化研究センター、2006年、31-35頁参照。

2 ルカ福音書においてはこの他、不正な裁判官の譬え(18:1-8)とファリサイ派と徴税人の譬え(18:9-14)を含むルカ18:1-14の箇所も、祈りに関する重要なまとまりとして挙げられる。

## 1. 私訳

11:1 さて、彼（イエス）はある場所で祈っていたが、〔祈りを〕終えると、彼の弟子たちの一人が彼に、「主よ、ヨハネが彼の弟子たちに教えたように、私たちに祈ることを教えてください」と言った。2a そこで彼（イエス）は彼らに言った。b「祈るときにはこう言いなさい。c『父よ、あなたの名が聖とされますように。d あなたの国が来ますように。 3 私たちに必要なパンを日々私たちに与えてください。 4a 私たちの罪を私たちに対して赦してください、私たち自身も私たちに負債のある人を皆赦しますから。 b そして私たちを誘惑に導き入れないでください』」。

5a 彼（イエス）はまた弟子たちに言った。b「あなたたちの中の誰かに友人がいて、真夜中に彼のところに行き、彼に言ったとしよう。c『友よ、パンを三つ私に貸してください。6 旅行中の私の友人が私のところにやって来たのですが、私は彼に差し出すものを何も持っていないのです』。7 すると彼は、家の中から答えて言うだろう。『私に面倒をかけないでください。すでに戸は閉められており、私の子供たちは私と一緒に寝床に入っています。起きてあなたに〔何かを〕与えることはできません』。8 私はあなたたちに言うておく。彼（その友人）は、〔その人が〕彼の友人だからという理由では起きて彼（その人）に〔何かを〕与えるようなことはなくても、〔執拗に頼めば〕彼の執拗さのゆえに、起きて必要なものは何でも彼に与えてくれるであろう。9a そこで私はあなたたちに言うておく。b 求めなさい。そうすればあなたたちに与えられる。c 探しなさい。そうすればあなたたちは見出す。d〔門を〕たたきなさい。そうすればあなたたちに〔対して〕開かれる。 10 というのも、誰でも、求める者は受け、探す者は見出し、〔門を〕たたく者に〔対して〕開かれるからである。 11 また、あなたたちの中に、子どもが父親に魚を求めるのに、魚の代わりに蛇を彼に与える者がいるだろうか。 12 あるいは、卵を求めるのに、さそりを彼に与える者がいるだろうか。 13 このように、あなたたち自身は悪い者たちであっても、自分たちの子どもたちには良いものを与えることを知っているなら、ましてや天の父は、彼に求める者

たちに聖霊を与えてくださる」。

## 2. 文脈と構成

ルカ福音書の文脈においては、隣人愛を勧告するサマリア人の譬え（10:25-37）と御言葉を聞くことの重要性を強調するマルタとマリアの物語（10:38-42）の直後には、主の祈り（10:1-4）、パンを求める人の譬え（10:5-8）、祈願の要求と祈りの聴許（10:9-13）というように、祈りを主題とする一連の記述が続いている。各小段落は、神を意味する「父」（2, 11, 13節）、(ἐπι)δίδωμι（与える [3, 7, 8<sup>×2</sup>, 9, 11, 12, 13節]）及び「食物を求める願い」（3, 5, 11, 12節）等によっても相互に結合しており、また、弟子に対する教えという観点において、これらの記述は先行する二つの段落と結合している。一方でマタイの記述においては、主の祈り（マタイ6:9-13）は祈りに関する教え（同6:5-8）と他人の過ちを赦すようにとの要求（同6:14-15）によって枠付けられ、ルカとは異なる文脈において一つのまとまりを構成しており、また祈願の祈りの要求（同7:7-11）は、少しあとの黄金律（同7:12）の直前に位置づけられている。この段落全体は以下のように区分される。

（1）序：イエスの祈りと弟子たちの要望（1節）

（2）主の祈り（2-4節）

（a）イエスの返答と祈りの指示（2ab節）

（b）呼びかけ、第一祈願：御名の聖化（2c節）

（c）第二祈願：御国の到来（2d節）

（d）第三祈願：日々のパン（3節）

（e）第四祈願：罪の赦し（4a節）

（f）第五祈願：誘惑からの回避（4b節）

（3）パンを求める人の譬え（5-8節）

（a）導入句（5a節）

（b）友人への願い（5b-6節）

- (c) 当初の友人の反応 (7節)
- (d) 解釈的帰結：執拗な願いに対する友人の反応 (8節)
- (4) 祈願の要求と祈りの聴許 (9-13節)
  - (a) 祈願の要求とその帰結 (9節)
  - (b) 祈りの聴許の根拠 (10節)
  - (c) 修辞疑問による二つの実例 (11-12節)
  - (d) 結語：聴許の確信と聖霊の付与 (13節)

祈りを終えたイエスに弟子たちが祈りを教えてくれるように要望する冒頭の序(1節)は、直後の主の祈り(2-4節)のみならず、後続の箇所(5-13節)を含め、この段落全体にかかっている。

主の祈り(2-4節)は、冒頭の導入句と呼びかけ及びそれに続く計五つの祈願の祈りから構成されているが、祈願の祈りのみから構成されている点にこの祈りの大きな特質がある。五つの祈りは、最初の二つの「汝祈願」(2cd節)と後半の三つの「我ら祈願」(3-4節)に区分できるが、二つの「汝祈願」は並列的に構成されており(《命令文アオリスト+定冠詞+名詞+σου》)、各文節で韻をふんでいる。後半の「我ら祈願」については目だった並行性は確認できないが、一人称複数の人称代名詞(ἡμῶν, ἡμῖν, ἡμᾶς)が繰り返し(計6回)用いられている。

これに続くパンを求める人の譬え(5-8節)は、祈願の祈りとしての主の祈りの特質を強調しており、「パン」を求める願い(3, 5節)が双方の小段落を結びつけている。この譬えはまた、後出のやもめと裁判官の譬え(18:2-7)と、困難な状況に陥った人から助けを求められた人物は当初はその願いを聞こうとしなかったが、依頼人のあまりの執拗さのゆえに途中で考えを変えて最終的にその願いを聞き入れたという共通の筋をもち、熱心な祈りの必要性を強調すると共に、《小から大への推論》を用いて(13節参照)熱心な祈りが必ず聞き届けられることを示している点において共通しており<sup>3</sup>、両者は元来一対の譬え(男/女)だったのかもしれない<sup>4</sup>。

最後の小段落（9-13節）は直前の譬えの内容を受けて、祈り求めることとその願いが聞き届けられることを強調している。「〔門を〕たたく」（κρούω）という表現（9, 10節）は直前の譬えの内容を思い起こさせ、11節のτίνα ... ἐξ ὑμῶνは5節のτίς ἐξ ὑμῶνと共鳴している。また、αἰτέω（求める [9, 10, 11, 12, 13節]）及び (ἐπι)δίδωμι（与える [9, 11, 12, 13節]）がこの箇所全体を特徴づけており、末尾の13節はこの小段落のみならず、祈りの聴許を強調する5節以下の箇所全体を締めくくる結語として機能しており、神を父とする理解は主の祈りの呼びかけ（2c節）と響き合う。

なお一部の研究者は、5節以降の箇所について、5-10節と11-13節とに区分している<sup>5</sup>。確かにそのように解すると、両者は日常的な題材からの比喩表現（5-8節／11-12節）とそれへの適用句（9-10節／13節）から構成されている点で対応していることになる。しかしながら、9-10節と11-13節は神による祈りの聴許とその論証という観点において緊密に結合していることから、必ずしもそのように考える必要はないであろう。

### 3. 資料と編集

冒頭の序（1節）は、《καὶ ἐγένετο ἐν τῷ + 主語を伴う不定詞》（9:18, 29, 33; 11:1; 14:1; 17:14; 19:15; 24:4, 15, 30参照、特にκαὶ ἐγένετο ἐν τῷ εἶναι αὐτὸν ἐν ... προσευχόμενονは9:18と一致）、ὥς ... ἐπαύσατο（5:4参照）、《λέγωに類する動詞 + 前置詞 πρὸς + 対格》（新約用例169回中ルカ文書に149回使用）等のルカの表現

3 W. Ott, *Gebet und Heil. Die Bedeutung der Gebetsparänese in der lukanischen Theologie*, München 1965, pp. 23-31; D. R. Catchpole, "Q and 'The Friend at Midnight' (Luke xi. 5-8/9)," *JTS* 34(1983)407-408, 411-412参照。

4 A. Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu, 2. Teil: Auslegung der Gleichnisreden der drei ersten Evangelien*, Tübingen 1910, p. 283; A. Loisy, *L'Évangile selon Luc*, Paris 1924, p. 436; W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 345; Ott, op. cit., pp. 71-72.

5 J. B. Green, *The Gospel of Luke* (NICNT), Grand Rapids/Cambridge 1997, p. 445; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 410.

を含んでおり、ルカの編集句と考えられる (Jeremias 1980:195参照)<sup>6</sup>。

「主の祈り」(2.4節)はマタイ6:9-13にも伝承されており(ディダケー8:2も参照)、ルカ版の方が簡潔に構成されている。一方のマタイ版のテキストが山上の説教(マタイ5-7章)の中心部に位置し、「施し、祈り、断食」というユダヤ的敬虔の文脈に置かれ(マタイ6:2-4, 5-15, 6-18)、言葉数の多い異邦人の祈り(マタイ6:7-8)と対置させられているのに対し、ルカのテキストは、祈ることを教えて欲しいという弟子たちの要望にイエスが答える形で語られ、祈り求めることの重要性を強調する後続の箇所(11:5-13)と共に、祈りを主題とする段落を構成している。マタイとルカ双方のテキストは原初的にはQ資料に遡り、パンを求める祈願においていずれもἐπιούσιος(必要な)という他に用例のない語を含んでいることから、かなり初期のギリシア語伝承に基づいていると考えられる。もっとも、双方のテキストはそれぞれの教会で用いられていた祈りの本文を反映していると考えられ、形式的に整えられているマタイ版よりも簡略なルカ版の方が総じて原初的な形を保持していると想定される。

冒頭の呼びかけについては、ルカ版に見られる本来の「父よ」との呼びかけが、「天」という語を好むマタイによって「天におられる私たちの父よ」(マタイ6:9b)に拡大されたのであろう<sup>7</sup>。一方でマタイ版にのみ伝承されている「御旨の成就」の祈願(マタイ6:10bc)については、韻律上の理由からルカが削除したのでも<sup>8</sup>、マタイによる編集的付加でもなく、マタイの教会で用いられていたテキスト(=マタイ版Q)にすでに含まれていたと考えられ、同様に、誘惑からの回避に関する祈願に続く「悪より私たちを救い出してください」(マタイ6:13a)という後続

6 一方でH. Schürmann, *Das Lukasevangelium III/1* (HThK III/2/1), 2. Teil/Erste Folge (9.51-11.54), Freiburg/Basel/Wien 1994, p. 177は、ルカ5:33に依拠していると考えられる1節後半部はQ資料に遡る可能性を指摘している。

7 J. Nolland, *Luke 9,21-18,34* (WBC 35B), Dallas 1993, pp. 612-613; ヤング・ビヴィン著、河合一充訳『主の祈りのユダヤ的背景』、ミルトス、1998年、13-14頁は別意見。

8 M. フィロネンコ著、加藤隆訳『主の祈り—イエスの祈りから弟子たちの祈りへ』、新教出版社、2003年、83, 131頁に反対。Wolter, op. cit., p. 404もルカがこの祈りを知っていた可能性(22:42参照)を指摘している。

文もマタイ以前に付加されたと考えられる<sup>9</sup>。

一方で、個々の語彙については総じてマタイ版の方がむしろ原初的と考えられ、ルカは、δός (δίδωμι [与える] の命令法アオリスト形) を δίδου (同命令法現在形) に、σήμερον (今日) を τὸ καθ' ἡμέραν (日々) に (3節)、ὀφειλήματα (負債 [複数形]) を ἁμαρτίαι (罪 [複数形]) に (4a節) それぞれ置き換える等、部分的に編集の手を加えている。また、双方のテキストとも伝統的な祝祷 (及び末尾の「アーメン」) を含んでいない (代上29:11-13; デイダケー 8:2参照)。

主の祈りが元来アラム語で構成されていたことは多くの研究者が認めているが<sup>10</sup>、そのことは例えば、マタイとルカが、それぞれ同一のアラム語 (ܐܠܗܐ) に由来すると想定される ὀφειλήματα (負債) 及び ἁμαρτία (罪) を用いていることにも示されている。主の祈りはまた、ユダヤ教の十八祈禱 (シェモネ・エスレ) やカディシュの祈りにも近似し、各祈願にはユダヤ教の祈り等に並行例が見られ、特にキリスト論的な要素が見られないという意味でもユダヤ的な祈りである。しかしその一方で、「父よ」(アッバ) との呼びかけと祈りの簡潔さ、祈願の祈りのみによる構成、報復を求める祈願の欠如はイエスに特徴的であり、少なくとも祈りの核となる部分はイエスに遡ると考えられる<sup>11</sup>。

パンを求める人の譬え (5-8節) はルカに特有の記事であり、導入句 (5a節) を除くとルカの語彙は限られていることから<sup>12</sup>、全体としてルカ特殊資料に由来すると考えられ、イエスに遡る可能性も完全には否定できない<sup>13</sup>。前後の小段落 (1-4, 9-13節) と同様、この譬えもQ資料に含まれ、マタイが削除したという主

9 U. ルツ著、小河陽訳『マタイによる福音書 (1-7章)』(EKK 新約聖書註解 I /1)、教文館、1990年、479頁; I. H. Marshall, *The Gospel of Luke. A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978; p. 455.

10 J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke X-XXIV* (AB 28A), New York 1985, p. 901; ルツ、前掲書、480頁; Schürmann, op. cit., p. 204; O. クルマン著、川村輝典訳『新約聖書における祈り』(聖書の研究シリーズ 54)、教文館、1999年、86-87頁; フィロネンコ、前掲書、10-11頁参照。

11 ルツ、前掲書、482頁; Schürmann, op. cit., pp. 205-206; クルマン、前掲書、83-84頁。

12 J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, pp. 197-198参照。

13 Nolland, op. cit., p. 623.



張<sup>14</sup>は推測の域を出ない。末尾の解釈的帰結（8節）は、譬えの内容とスムーズに接合していないことから、おそらく二次的に（ルカによって？）付加されたのであろう<sup>15</sup>。

末尾の祈願の祈りの要求（9-13節）はマタイ7:7-11と緊密に並行しており、Q資料に遡る（トマス福92, 94参照）。マタイのテキストは、マタイ版の主の祈り（6:9-13）と同様、山上の説教の中に含まれているが、それとは異なる文脈に置かれている。ルカはマタイ7:9のἡ（あるいは）に対してδὲ（さて）を、ἄνθρωπος（人）に対してπατὴρ（父親）を用いているが、前者については、11-12節の修辭疑問を強調するため、後者については、おそらく地上の父と天の父との対比（13節）を強調するために置き換えられたのであろう。ルカはまた「パンに対する石」（マタ7:9）の実例を「卵に対するさそり」の実例で置き換え、さらに末尾の13節では、伝承（＝マタ7:11）におけるἀγαθά（良いもの）をπνεῦμα ἅγιον（聖霊）で置き換え<sup>16</sup>、εἶναι（εἶμιの不定詞現在形）の代わりにὑπάρχω（～である）を用いている（新約用例35回中ルカ文書に23回使用）。この小段落もまた、主の祈りと同様、その核となる部分においてイエスに遡る可能性がある。

一部の研究者は、以上の三つの小段落はすでにルカ以前に（ルカ特殊資料において<sup>17</sup>、Q資料（ルカ版Q資料）において<sup>18</sup>結合していたと主張しているが、《言述を表す動詞＋πρός＋対格》というルカの表現<sup>19</sup>を含む譬えの導入句（5a節）及び祈願の祈りを要求する最後の小段落の導入句（9a節）はルカの編集句と考えられることから<sup>20</sup>、むしろルカが結合したと考えるべきであろう。以上のこ

14 Catchpole, op. cit., pp. 423-424; H. Klein, *Barmherzigkeit gegenüber den Elenden und Geächteten. Studien zur Botschaft des lukanischen Sonderguts* (BThSt 10), Düsseldorf 1987, pp. 103-104; *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 402.

15 Ott, op. cit., p. 27.

16 Ott, op. cit., p. 108; S. Schulz *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten*, Zürich 1972, p. 162; F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas, II (EKK III/2)*, 2. Teilband: Lk 9,51-14,35, Zürich/Neukirchen-Vluyn 1996, p. 148.

17 J. Ernst, *Das Evangelium nach Lukas* (RNT), Regensburg 1976, p. 357.

18 Catchpole, op. cit., p. 420; H. Klein, op. cit., p. 400.

19 Jeremias, op. cit., p. 33参照。

20 Ott, op. cit., pp. 100-101; Schulz, op. cit., p. 161; Bovon, op. cit., p. 151参照。一方で

とからも、ルカはQ資料より得た2・4節及び9b・13節（すでにQで結合<sup>21</sup>？）をルカ特殊資料から得た5b・8節で結合し、自ら構成した序（1節）を付加するなど適宜編集の手を加えることによって、このルカ11:1-13全体を祈りの文脈のもとに構成したのであろう<sup>22</sup>。

## 4. 各節の検討

### 1節

イエスの祈りをきっかけとして、弟子たちはイエスに、洗礼者ヨハネが彼の弟子たち（5:33; 7:18参照）に教えたように、自分たちに祈ることを教えてくれるように要望する。このような弟子たちの要望は、イエスが祈りを捧げる姿を彼らが頻繁に目にしていたことに起因するのであろう（3:21; 5:16; 6:12; 9:18, 28-29; 10:21参照）。注目すべきことに、ここでも洗礼者ヨハネが引き合いに出されているが（1:5-2:40; 3:1-4:44参照）、ルカにおいて教える行為を实践する存在はイエスと聖霊（12:12）のみであり、実質的にイエスが唯一の教師と見なされている<sup>23</sup>。

### 2節

弟子たちの要望に答えて、イエスは「祈るときには」（ὅταν προσεύχησθε [マタ6:5参照]）こう言いなさいと語り出し、「主の祈り」を唱え始める。一方のマタイ（及びその教会）が伝承を拡大することに特に抵抗を感じていなかったと推察されることから、主の祈りを一つの実例として捉えていたのに対し、ルカはこの祈りを祈りの定式として提示している。

最初に「父よ」（πάτερ）との呼びかけがなされるが<sup>s</sup>（10:21-22参照）、この呼び

Fitzmyer, op. cit., p. 913はこの箇所をQ資料に帰している。

<sup>21</sup> Ott, op. cit., p. 92; Schürmann, op. cit., pp. 220-221.

<sup>22</sup> エレミアス、前掲書、172頁; C. H. Talbert, *Reading Luke: A Literary and Theological Commentary on the Third Gospel*, Georgia 2002, p. 133.

<sup>23</sup> Schürmann, op. cit., p. 176.

かけはアラム語の「アッパ」(אבא)に相当し(マコ14:36)、イエス自身も「アッパ」を用いて祈ったと考えられ<sup>24</sup>、弟子たちにもそのように呼びかけるように勧めている(ロマ8:15; ガラ4:6参照)。当時のユダヤにおいても神をイスラエル民族の「父」と見なすことは珍しくなかったが(申32:6; イザ64:1; マラ1:6; ソロ詩14:3; Ⅲマカ6:3, 8; シラ23:1, 4; 51:10; 死海文書「感謝の詩篇」9:29; さらに6:30; 12:30並行参照)、神に対して直接「父よ」と呼びかけることは稀であり(シラ23:1参照)、ましてや、ごく親しい間柄を前提とする親しみをこめた表現である「アッパ」を用いることは考えにくかった<sup>25</sup>。確かに、神に対する「アッパ」という呼びかけがイエス以前になされた例も確認されていることから(詩89:27; マラ2:10のタルグム及び死海文書4Q372 1:16参照)、この呼びかけは必ずしもイエス固有のものではなかったが<sup>26</sup>、それでもこの呼びかけがイエスに特徴的であったことは否定できないであろう。

同様の形式で並列的に構成されている最初の二つの祈願は、内容的に相互に密接に関わっており、双方ともアラム語で構成されたカディシュの祈り<sup>27</sup>に近似し、そこから影響を受けていると考えられる<sup>28</sup>。

神に対して「父よ」と呼びかけられた直後には、まずその神の名が聖とされるようにと祈られる(ヨハ12:28参照)。注目すべきことに、共観福音書のイエスの宣教においては「神の名」に言及されるのはこのみである。ここでの「名」は神の内的本質を表し(出3:13, 24参照)、この祈願は神の強力な働きと輝かしい存在がこの世界において表明されることを祈り求めており(エゼ36:23参照)、そ

24 Jeremias, Das tägliche Gebet im Leben Jesu und in der ältesten Kirche, in ders., *Abba*, Göttingen 1966, pp. 67-80.

25 エレミアス著、川村輝典訳『新約聖書の中心的使信』(新教新書120)、新教出版社、1986年、116-141頁。

26 Nolland, op. cit., p. 63; フィロネンコ、前掲書、43-52頁参照。

27 「偉大なものとされるように、聖なるものとされるように、神の偉大な名が、彼の意図に従って、彼が作った世界において。そして彼が、彼の支配を行き渡らせるように、あなた方が生きている間に、そしてあなたの方の日々のうちに、イスラエルの全家が生きている間に、そしてそれが間もなく実現するように、そして近い時のことであるように、そして言え、アーメンと。……」(フィロネンコ、前掲書、31頁より引用)。

28 さらに十八祈祷の第三祈禱:「汝は聖く、汝の名は恐るべきかな」も参照。

の意味で直後の御国の到来の祈願とも密接に関わっており、終末論的に理解される。その一方で、神の名の聖化は神によってのみならず、人間によっても達成されるべきものであり、その意味でこの祈願は、すべての人間が神の御名を崇める（聖別する）ようにとの願いとしても解され（イザ29:23; 詩99:3）、その場合この祈願は、祈禱者が神に服従する意志を表明する信仰告白とも見なしうる。

御名の聖化を求める祈願のあとには神の国（神支配）の到来を求める祈願が続いている。神支配についてはイエス以前のユダヤにおいても待望されていたが（イザ40:10; モーセ遺訓10:1参照）、神の国の到来の使信はイエスの宣教の中心内容である（4:43; 8:1; 9:11）。この祈りが弟子たちによって唱えられたのであれば、当時の教会はなお神の国の到来を待ち望んでおり、終末遅延は前提とされていなかったことになる。ルカとその読者にとっては、神の国がイエスにおいてすでに徴として生起したのであり（11:20; 17:20-21参照）、それゆえ弟子たちは、神の国が生起するその只中においてこの祈りを唱え、この祈願の成就をイエスにおいて確信するのである<sup>29</sup>。

### 3節

マタイ版の御旨の成就の祈願（マタ6:10）を欠くルカにおいては、御国の到来の祈願の直後に最初の我ら祈願であるパンを求める祈願が続いているが（ルカ4:3-4参照）、ここでのパンは文字通りのパンのみならず、食物全般を意味している。この祈願はその元来の形においては、神が「今日」パンを与えてくれるようにとの祈りであったと考えられるが（マタ6:11）、ルカは「今日」（σήμερον）を「日々」

29 Schürmann, op. cit., pp. 186-187は、この御国の祈願を主の祈りの中心と見なしているが、その点は十分に根拠づけられていない。なおこの節に関しては、D写本に「あなたの国が私たちの上に（ἐφ' ἡμᾶς）来るように」との異文があり、また写本700及び162には「あなたの聖霊が私たちの上に到来し、それが私たちを清めるように」（ἐλθέτω τὸ πνεῦμα σου τὸ ἅγιον ἐφ' ἡμᾶς καὶ καθαρῶς ἡμᾶς）という記述が見られる。両者ともにタルグムの背景があるものと想定され（フィロネンコ、前掲書、75-82頁）、写本上の証拠は強くないが、特に御国が聖霊に置き換えられている後者の読みは、マルキオンやニッサのグレゴリウスによって採用されており、後続のルカ11:13における聖霊の付与への言及との関連から（使15:8も参照）、研究者の中にもこの読みを支持する者が少なくない（Loisy, op. cit., p. 315; Ott, op. cit., pp. 112-122）。

(τὸ καθ' ἡμέραν) に置き換え (9:23; 16:19; 19:47; 22:53; 使17:11参照)、δός (命令法アオリスト形) を διίδου (同命令法現在形) に置き換えていることから、継続性を強調すると共に終末論的視点を和らげようとしている<sup>30</sup>。

両福音書記者は、人々が願い求めるべきこのパンを、新約のこの箇所以外には一部のパピルス文書にしか認められない極めて珍しい ἐπιούσιος という形容詞で表現している。この語は《ἐπί (～の上に) + οὐσία (存在・実態)》から「実体を越えた」／「(生存に) 必要な」、ἐπὶ τὴν οὐσαν (ἡμέραν) から「今日のための」あるいは「日毎の」、さらには ἐπιέναι (近づいてくる) ないし ἡ ἐπιούσα (来たる日) から「来たるべき日の」／「明日の」と解される可能性もあり、決定は難しい<sup>31</sup>。比較的多くの研究者は「明日の」という意味で解しているが<sup>32</sup>、この理解は、今日「明日のパン」以外にもはや何も求めない者は、神の配慮に信頼し、神に新しいマナの奇跡 (出エ16:4以下) を願うという意味でふさわしいように思えても、明日のことを思い悩むなど述べるイエスの発言 (12:22-31並行) とは矛盾しているように考えられる<sup>33</sup>。むしろ、特に「今日」を「日々」で置き換えているルカの文脈においては「必要な」の意味で解する方が適切であるように思われ<sup>34</sup>、この理解は箴言30:8 (「私に適する量のパンで味わわせてください」) とも共鳴している。さらにこの語が、来たるべき御国とその食事にも関連づけられていた可能性も完全には否定できないが、ルカにおける「今日」から「日々」への修正に鑑みても、ルカのテキストにおいては特に終末論的観点が強調されていると

30 Schneider, op. cit., p. 258によると、「今日」から「日々」への修正は、神が人々の食物を配慮するという意味で神の摂理が考えられていることを間接的に示している (使14:17参照)。

31 W. Bauer *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, hrsg. von K. Aland und B. Aland. 6. Aufl. Berlin/New York pp. 601-602; H. バルツ・G. シュナイダー編／荒井献・H. G. マルクス監修『ギリシア語聖書釈義事典』II、教文館、1994年、62頁参照。

32 ルツ、前掲書、492-495頁; クルマン、前掲書、106-109頁; H. ヴェーダー著、嶺重・ルスターホルツ訳『山上の説教—歴史的意味と今日的解釈』、日本キリスト教団出版局、2007年、229頁。

33 クルマン、前掲書、108-109頁は別意見。

34 Schürmann, op. cit., pp. 193, 195; ヤング・ビヴィン、前掲書、43-45頁; R. A. カルペナー著、太田修司訳『ルカ福音書』(NIB新約聖書註解4) ATD・NTD聖書註解刊行会、2002年、301頁; Klein, op. cit., 406.

は考えにくい<sup>35</sup>。

#### 4節

必要な糧を求める祈願に続いて「私たちの罪を私たちに対して赦してください」という祈願が続いているが、この祈りは内容的に十八祈禱の第六祈祷（「私たちを赦してください、私たちの父よ、私たちは罪を犯しました」）と近似している。ここでルカは、人間間の借金の意味でも解しうる「負債」（ὀφειλήματα [マタ6:12]）に代えて「罪」（ἁμαρτίαι）を用いることにより、神の前における罪を異邦人の読者にもわかるように示している<sup>36</sup>。後半部では「私たち自身も私たちに負債のある人を皆赦しますから」との理由を示すγάρに導かれる文章が続くが、ここではὀφείλοντι（ὀφείλω [負債がある] の現在分詞男性単数与格）という語が用いられ、ὀφειλέταις（ὀφειλέτης [負債] の男性複数与格）を用いるマタイ6:12と同様、人間間の負い目が問題にされている。

ここでルカは、マタイのὥς（～のように）に対してγάρ（～だから）を用い、さらにαὐτοίを用いることによりこの箇所を明らかに強調しているが、不確かなのは、この祈願の根拠づけの部分において、「私たちも……赦しましたように」（ὥς καὶ ἡμεῖς ἀφῆκαμεν ...）というように過去の事柄として神の赦しに対する前提条件のように表現するマタイ版に対し<sup>37</sup>、「私たちも～赦しますから」（καὶ γὰρ αὐτοὶ ἀφίομεν ...）と決意表明として表現するルカのテキストがルカ自身によってもたらされたのかどうかという点である。確かに、無慈悲な僕の譬え（マタ18:21-35）の結部は、マタイがここでも人間間の赦しを神の赦しの前提条件として構成したように想定させるが（マタ5:23-24; 6:12, 14-15も参照）、ルカがすでに3節において勧告的な視点を強調しており、さらにここでは「皆」（παντί）という編集句によって決意表明の観点を強調していることは、ルカがここでも同様

35 Catchpole, op. cit., p. 420.

36 Bovon, op. cit., p. 121; 中野実「私たちも負債のある者たちを赦しましたように―イエスの祈りとしての「主の祈り」」『神学』70号、東京神学大学神学会、2008年、213-214頁参照。

37 Cf. シラ28:2:「隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願ひ求めるとき、お前の罪は赦される」。

の観点から構成したことを示している。この罪の赦しの祈願と将来の終末の裁きとの関連も否定できないが<sup>38</sup>、ルカにおいてはその点は強調されておらず、神が今日すでにその赦しをもたらすことが求められている。

これに続く誘惑の回避を求める祈願によって主の祈りは締めくくられる。πειρασμός（誘惑）はギリシア語の世俗文学においては稀にしか見られないが、七十人訳聖書に頻出する。この語は本来、忠実さを試すための試練という意で肯定的に用いられるが、悪魔による誘惑等の否定的な意味でも用いられ（4:13参照）、ルカの文脈においても、誰によってそれが起こされるかは明らかにされないまでも、否定的な意味合いが強く看取される<sup>39</sup>。ここではまた、終末時の誘惑よりもむしろ日常的な誘惑が意味されており、神によって様々な誘惑が取り除かれることが求められている（21:8以下）。誘惑の時は常に離反の最大の危機だからであり（8:13）、だからこそ誘惑から逃れることができるように祈り求めるべきなのである。誘惑は弟子たちにとっても現実的な事柄であり、誘惑に関する知識は弟子たちの信仰を強固なものにする。

## 5-6節

「主の祈り」を弟子たちに示した後、イエスは今度は譬えを弟子たちに語り出す。ここでイエスは、「あなたたちのうちの誰か」（τις ἐξ ὑμῶν）という、しばしば譬えの導入部分に使用されている表現を用いることにより（11:11; 12:25; 14:28; 15:4; 17:7参照）、聞き手である弟子たちを話の中に引き込み、譬えに登場する懇願者と同一視させる方向へと導いていく。

この譬えはガリラヤの村の状況を念頭においていると想定される。ある人のもとを旅行中の友人が訪れるが、突然の来客をもてなす食物がないため、彼は真夜中に別の友人を訪ね、客に振る舞うためのパンを三つ貸してくれるように懇願する。旅人をもてなすことは、ユダヤ世界において伝統的に重視されてお

38 G. シュトレッカー著、佐々木勝彦・庄司眞訳『山上の説教』註解、ヨルダン社、1988年、227頁参照。

39 Wolter, op. cit., p. 409に反対。

り（創18:1以下；ヨブ31:32他）、また三つのパンは一人分の食事に相当するのであろう<sup>40</sup>。なお、真夜中に訪問客が訪れるという状況の不自然さがしばしば問題にされるが、全くあり得ないことでもなく、その理由（日中の暑さを避けて夜間の旅？、舟の到着遅延のため？）を必要以上に詮索すべきではないであろう。

## 7節

しかしその友人は、「私に面倒をかけないでください」（μή μοι κόπους παρέχε）と、最初はその願いをはっきりと拒絶する<sup>41</sup>。すでに戸は閉められ、おそらく一部屋しかない貧しい農民の住居の中で（マタ5:15参照）子どもたちは寢床に入っており、今から起きて何かを与えようとすると扉の錠と固いかんぬきをはずさねばならず、その物音で子どもたちも起こすことになり、様々な支障が生じ、迷惑だというのである。ἦδη（すでに）は、この友人が彼の依頼を迷惑に感じている状況を如実に示している。また、直前の嘆願者の発言が「友よ」という呼びかけで始まっているのに対し、ここでの友人の返答がそのような呼びかけを含んでいないことは、このときのその友人のいらだちを示しているのかもしれない。ところで、エレミアスをはじめ多数の研究者は、5-7節を一つにまとめた修辞上の問いとして理解し、願いを拒絶する7節の友人の描写は、それに対する「そのようなことは絶対に考えられない」という聞き手の反応を前提に語られていると主張している<sup>42</sup>。確かに、5-7節で完結していたと考えられる元来の譬えにおいてはそうであった可能性は高いが、後続8節の「彼の友人だからいう理由では……与えなくても」という文章は、通常の友人関係においてその願いが拒絶され得ることを前提としていることから、現行のルカの文脈においてはそのように考える必要はないであろう<sup>43</sup>。

40 エレミアス、前掲書、1969年、172頁。

41 Cf. 18:5: διὰ γε τὸ παρέχειν μοι κόπον τὴν χήραν ταύτην（このやめもは私に迷惑をかけるので）。

42 エレミアス、前掲書、173-174頁。

43 Fitzmyer, op. cit., pp. 910-911; K. Löning *Das Geschichtswerk des Lukas*, II: Der Weg Jesu, Stuttgart, 2006, p. 60参照。



## 8節

譬えの結部においては、直前の7節の記述とは明らかに異なり、最終的にはその友人もその願いを聞き入れてくれるというイエス自身の確信が述べられる。すなわち、友人だからという理由ではその願いは聞き入れられなくても、執拗に願い求めることによって、その「執拗さ」(ἀναίδεια)<sup>44</sup>のゆえにその願いは聞き届けられるというのである。ルカにおける祈りの文脈に鑑みて、ここではすでに、熱心な祈りは必ず神に聞き届けられるという確信が表明されている。この解釈的帰結は直前の7節と「起きて与える」(ἀναστὰς δοῦναί [7節] / δώσει ... ἀναστὰς [8節])という表現を共有しているが、7節ではむしろ願いに対する友人の拒絶について述べられ、執拗な願いについては強調されていないという意味でも、両者はスムーズにつながっていない。なお一部の研究者は、ἀναίδειαをむしろ肯定的に「羞恥心(恥の感覚)」の意味で捉え、この名詞の直後のαὐτοῦ(彼の)を依頼された友人の方に向け、この箇所を、その友人が願いを拒絶したことが知れ渡ることから生じる彼自身の「恥辱のゆえに(恥辱を避けるために)」という意に解している<sup>45</sup>。しかしながら、並列している直前の「彼の友人」(φίλον αὐτοῦ)の「彼」は明らかに依頼者を指していることから、ここでの「彼」も依頼者と解するのが自然であり、もし依頼を受けた友人の方を指しているなら、ἀναίδειαの直後にαὐτοῦ(人称代名詞三人称男性単数属格)ではなくἐαυτοῦ(再帰代名詞)を用いるべきところであろう<sup>46</sup>。

## 9節

直前の譬えの内容を受け、ここではイエスの確信を示す「そこで私はあなたたちに言うておく」という導入句に続き、「求め」、「探し」、「門をたたく」ようにという三重の要求がなされ、それと同時に、そうすれば「与えられ」(6:30)、

44 直訳すると「恥知らず」、「厚かましさ」となり、新約ではここにのみ用いられる。他の用例については Catchpole, op. cit., pp. 409-411 参照。

45 エレミアス、前掲書、173頁、E. ユンゲル著・高橋敬基訳『パウロとイエス』、新教出版社、1970年、224-225頁；Nolland, op. cit., pp. 624-626；Marshall, op. cit., p. 465。

46 Fitzmyer, op. cit., p. 912；Bovon, op. cit., p. 150。

「見出し」(2:44, 46, 48; 使17:27)、「開けてもらえる」(12:36; 13:25参照)と、それぞれの要求の実践に対する帰結が述べられる(エレ29:12-13 [=エレ36:12-13 LXX] 参照)。冒頭の三重の要求は、反復を意味する命令法現在形が用いられていることから継続的に求め続けることを要求しており、また、未来形受動態で構成されている最初と最後の帰結文については神の意志が暗示され(神的受動)、終末論的観点が含まれている<sup>47</sup>。三重の要求の中でも冒頭の「求めなさい。そうすれば……与えられる」という表現は標題的な意味をもっているが<sup>48</sup>、動詞が三様に変化しつつ繰り返されることによって要求の緊急性・切実性が強調されている<sup>49</sup>。

## 10節

前節に続いて、「(誰でも) ~する者は~されるから」というように、同様に三重の文章によってこれらの記述の根拠づけがなされる。要求された行動のそれぞれの帰結について、直前の箇所では未来形が用いられていたのに対し、ここでは現在形が用いられており(一部の写本は未来形)、願いが聞き届けられるという確信がより一層明確に表現されている。その一方で、マタイの並行箇所においては願いが文字通りに聞き届けられることが自明のこととして語られているのに対し、執拗さのゆえに願いが聞き届けられるというイエスの発言(8節)の直後に続くルカの文脈においては、願いの執拗さとの関連において聴許について語られている<sup>50</sup>。なお、ここでは求める対象は明示されていないが、イエスの宣教の元来の文脈においては「神の国」が対象とされていたのかもしれない(マタ6:33//ルカ12:31参照)。

47 Lönning, op. cit., pp. 60-61.

48 H. Strack/P. Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, I, München 1922, p. 458参照。

49 シェトレッカー、前掲書、288頁; ルツ、前掲書、551頁。

50 Ott, op. cit., pp. 99-101.

## 11-12節

そこで、願いが聞き届けられることを示す二つの実例が示されるが、ここで二つの修辞疑問は否定の答えを前提としている。魚を求める子どもに蛇を与える父親はおらず、同様に、卵を求める子どもにさそりを与える父親もない。マタイの並行箇所においても二つの実例が示されているが（マタ7:9-10）、マタイ版では最初に、ルカには見られない「パンに対する石」の実例が示され、そのあとにルカ版では最初に挙げられている「魚に対する蛇」の実例が続いている。蛇とさそりの対句は申命記8:15にも見られるが、おそらくマタイ版の方が原初的であり<sup>51</sup>、ルカはQ資料における《必要なものと不必要なものとの対比》を《役立つものと有害なものとの対比》に置き換えたのであろう<sup>52</sup>。この改変の背景には、ルカが蛇やさそりを踏みつける権威をイエスが弟子たちに授けたと記すルカ10:19の影響があるのかもしれない<sup>53</sup>。

## 13節

最後に、ここまでの記述を踏まえつつ、「悪い者たち」（πονηροί）である人間と天の父との対比をもとに《小から大への推論》によって、祈りの聴許について結論的に述べられる。すなわち、邪悪な存在であるこの世の父親である人間ですら自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのなら、天の父である神はなおさら、祈り求める者に良いものを与えるに違いないというの

51 Nolland, op. cit., pp. 629-630は別意見。

52 Loisy, op. cit., p. 319; Ott, op. cit., p. 110; Schulz, op. cit., p. 162; E. Klostermann *Das Lukasevangelium*, (HNT 5) Tübingen 1975, p. 126; 山田耕太『Q文書—訳文とテキスト・注解・修辞学的研究』教文館、2018年、215頁。

53 なお、「パンに対する石」の実例は通例は省略されたと見なされるが、大部分の大文字写本には含まれていることから（ $\aleph$ , A, C, D, L, W,  $\Theta$ ,  $\Psi$  他）、一部の研究者はこの実例も元来のルカのテキストに含まれており、直前の祈願の要求の言葉に対応する形でここでも三つの実例が並列されていたと主張している（Bovon, op. cit., pp. 153-154; 田川建三著訳『新約聖書 訳と註2上 ルカ福音書』作品社、2011年、298-299頁）。確かに、「パンに対する石」の実例は直前の箇所（3, 5節）に対応し、一貫性の観点からも整合性があるが、それだけに後代の付加である可能性も十分に考えられ、また「より短い本文がより原初的」という本文批評上の原則からも受け入れ難い。

である。ルカはここで天の父が与える「良いもの」(マタ7:11)を「聖霊」に置き換えることにより、人間と神の対比を一層際立たせると共に、神が与えるものが、マタイにおけるように「この世のもの」ではなく(マタ18:19; 21:22参照)、それを越えた次元に存在し、将来的に(イエス亡き後に)与えられ、終末のときまで教会が必要とする聖霊であることを明らかにしている(24:49, 使1:5, 8; 2:4, 34参照)。なお、ὁ πατήρ [ὁ] ἐξ οὐρανοῦ δώσειという珍しい表現は、「天からの父が～を与える」という意味でなければ「父が天から～を与える」という意味であろう。

## 結び

以上の検討から、ルカ11:1-13の祈りに関するイエスの一連の教えの主眼点については、以下のようにまとめることができる。ここではまず、弟子たちが実践すべき祈りとして「主の祈り」(24節)が示されるが<sup>54</sup>、この祈りは前半の「汝祈願」と後半の「我ら祈願」から構成されている。このことから、ここでは祈願の祈りが中心になっていることは明らかであるが、前半部の「汝祈願」は明らかにユダヤ的な祈りの影響を強く受けているのに対し、後半部の「我ら祈願」はイエスに特徴的な祈りと見なしうる。この主の祈りに続いて、執拗な祈りが最終的に聞き届けられることを示す譬え(5-8節)、さらには祈りの聴許の確信に基づく勧告(9-13節)が述べられるが、これらの箇所では、失望することなく熱心に祈り求めるならばその願いは必ず聞き届けられるという点が強調されている。

以上のことから、この一連の祈りの教えにおいては、祈願の祈りの要求と聴許の確信という二つの主眼点があることは明らかであろう。その一方で、明確な聴許の確信があるなら、必ずしも熱心に祈り求める必要はないとも考えられることから、この二つの主眼点は必ずしも適合しておらず、むしろ緊張を含んでいる。事実、このルカの文脈においては、祈りが聞き届けられるように熱

54 その意味では、この祈りは「主の祈り」というよりもむしろ、「弟子たち(信者たち)の祈り」と称すべきかもしれない。

心に祈り求めることが要求されているのではなく、祈りは聞き届けられるという確信を前提として熱心に祈り求めることが要求されている。もっともルカにおいては、祈願の文字通りの聴許が言明されているわけではなく、熱心な祈願に対して「この世のもの」を越えた次元にある「聖霊」が与えられるという意味での聴許なのであり<sup>55</sup>、その意味でも、ここでは祈りそのものがこの世的な次元からそれを越える天的な次元にまで高められているといえよう。

---

<sup>55</sup> Ott, op. cit., pp. 106-109.